

年譜 黒井千次

一九三二年（昭和七年）

五月二八日、東京府豊多摩郡杉並町大字高円寺六二〇番地（現・杉並区高円寺）に生まれる。本名、長部舜二郎。父、謹吾は当時、東京区裁判所兼地方刑事裁判所検事。後、最高裁判事を経て弁護士に。母、靖子との間の次男。

一九三四年（昭和九年） 二歳

父の転勤で名古屋市に移る。

一九三七年（昭和十二年） 五歳

父の転勤で東京に戻る。淀橋区西大久保（現・新宿区大久保）に住む。以後現在までの大半を、中野・小金井・府中など、東京西部のＪＲ中央線沿線で過ごす。

一九三九年（昭和十四年） 七歳

四月、豊島区立高田第五小学校に越境入学。

一九四四年（昭和十九年） 一二歳

八月、長野県下高井郡平穏村の上林温泉に学童集団疎開。

一九四五年（昭和二十年） 一三歳

三月、中学進学のために帰京。四月、東京都立武蔵ヶ丘中学校に入学。六月、都下小金井に移転し都立第十中学校に転校。一二月、府中に移転。

一九四八年（昭和二十三年） 一六歳

この頃より学校の友人達と作った同人誌『ひとで』に小説の習作を載せる。

一九四九年（昭和二十四年） 一七歳

四月、『蛍雪時代』学生懸賞小説に応募した「歩道」が二等に入選、初めて小説が活字になる（全文掲載は五月）。賞金は五千円。

一九五〇年（昭和二十五年） 一八歳

都立第十高校（旧都立第十中学校）は都立西高校と改称。八月、中野区塔ノ山町（現・中野区本町）に移転。

一九五一年（昭和二十六年） 一九歳

三月、都立西高卒業。四月、東京大学教養学部文科一類に入学。父が長野に転任になったため、大森の知人宅から通学。大学では民主主義文学研究会に所属。

一九五二年（昭和二十七年） 二〇歳

五月、皇居前広場におけるメーデーに参加（メーデー事件）。一二月、父が転任で東京に帰ったため、中野の自宅に戻る。

一九五三年（昭和二十八年） 二一歳

四月、経済学部経済学科に進む。横山正彦助教授の経済原論のゼミに参加。

一九五五年（昭和三十年） 二三歳

三月、東京大学卒業。「物を作る場所に身を置きたい」と考え、四月、富士重工業株式会社に入社。当初は二、三年の「社会実習」のつもりだった。群馬県伊勢崎製作所勤務となり、寮生活。

一九五八年（昭和三十三年） 二六歳

二月、黒井千次のペンネームで「青い工場」を『新日本文学』に発表。以後同誌を主な舞台として、工場や企業内部での労働に違和感を抱く人物を描いた小説を多数発表していく。六月、「メカニズムNo.1」を『文学界』に発表、文芸誌に載った最初の作品となる。

一九五九年（昭和三四 年） 二七歳

十一月、富士重工業本社への転勤により帰京。

一九六〇年（昭和三五年） 二八歳

十二月、「テレビ独立」を『新日本文学』に発表。

一九六一年（昭和三六年） 二九歳

四月、「ビル・ビリリは歌う」を『新日本文学』に発表。五月、黒川千鶴と結婚、東中野のアパートに転居。八月から一〇月にかけて「冷たい工場」を『新日本文学』に連載。

一九六三年（昭和三八年） 三一歳

九月、エッセイ「可能性と現実性」を『文学』に発表、以後、エッセイの執筆も増える。十一月、「二つの夜」を『文芸』に発表。

一九六七年（昭和四二年） 三五歳

七月、同人誌『層』に参加。九月、戯曲「ゼロ工場より」を『層』五号に発表。

一九六八年（昭和四三年） 三六歳

三月、「聖産業週間」を『文芸』に、九月、「穴と空」を『層』七号に発表。「穴と空」は昭和四三年度下半年芥川賞候補となる。以後、五回連続して作品が候補に選ばれる。

一九六九年（昭和四四年） 三七歳

二月、一九五二年の「メーデー事件」に関わった人々のその後を描いた「時間」を『文芸』に、三月、「騎士グーダス」を『文学界』に、六月、「空砲に弾を」を『文芸』に、「灰色の記念碑」を『新潮』に発表。「時間」は、昭和四四年度上半期芥川賞候補となる。八月、第一作品集『時間』を河出書房新社より刊行。九月、「花を我等に」を『文芸』に、十一月、「星のない部屋」を『文学界』に、「ネネネが来る」を『月刊ペン』に、十二月、「時の鎖」を『新潮』に、「首にまく布」を『新日本文学』に発表。

一九七〇年（昭和四五年） 三八歳

一月、『時の鎖』を新潮社より刊行。三月、富士重工業（最後は宣伝部に所属）を退社。以後文筆生活にはいる。「時間」によって第二〇回芸術選奨文学部門新人賞受賞。四月、「赤い樹木」を『文学界』に、五月、「走る家族」を『文芸』に、「椅子」を『早稲田文学』に、六月、「〈S〉でのたくらみ」を『すばる』に、八月、「見知らぬ家路」を『新潮』に、九月、「闇の船」を『文学界』に、一〇月、「夜と果実」を『層』終刊号に、「虫」を『群像』に発

表。同月、『見知らぬ家路』を文芸春秋より刊行。この頃より、家族を主題とする小説が多くなる。

一九七一年(昭和四六年) 三九歳

四月、「揺れる家」を『文芸』に、八月、「失うべき日」を『すばる』に発表。同月、『走る家族』を、また十二月、文学上の閲歴を書いた第一エッセイ集『仮構と日常』を河出書房新社より刊行。この年より、古井由吉・後藤明生・阿部昭・坂上弘らと共に「内向の世代」と呼ばれるようになる。

一九七二年(昭和四七年) 四〇歳

一月、『新鋭作家叢書(黒井千次集)』を河出書房新社より刊行。十一月、「夢のいた場所」を『文学界』に発表。

一九七三年(昭和四八年) 四一歳

七月、「風の絵本」を『群像』に発表。また、連作小説「眼の中の町」にまとめられる小説を『文芸』に発表し始める。第一話は九月、「猫の車」、第二話は十一月、「弔横丁」。

一九七四年(昭和四九年) 四二歳

五月、「花鋏を持つ子供」を『新潮』に、七月、エッセイ「戦後を指さす三本の指」を『文芸展望』に発表。九月、「ゼロ工場より」が劇団民芸により上演される。

一九七五年(昭和五〇年) 四三歳

二月、「父と子」(第六話)を『文芸』に発表し「眼の中の町」完結。三月、「声の山」を『海』に発表。七月、連作『眼の中の町』を河出書房新社より刊行。

一九七六年(昭和五一年) 四四歳

十一月、エッセイ「現代における個と集団」を岩波講座『文学』第一一巻に発表。

一九七七年(昭和五二年) 四五歳

二月、『五月巡歴』を書き下ろして河出書房新社より刊行。「時間」に続き、メーデー事件のその後を扱った作品となる。四月、「果実のある部屋」を『新潮』に、七月、「闇に落ちた種子」を『新潮』に、一〇月、「家鬼」を『文芸』に発表。同月、「花鋏を持つ子供」「果実のある部屋」「闇に落ちた種子」を三部作とする『禁域』を新潮社より刊行。

一九七八年(昭和五三年) 四六歳

三月、「――のための」を『文体』春季号に、五月、「冬の手紙」を『群像』に、一〇月、戯曲「家族展覧会」を『すばる』に発表。

一九七九年(昭和五四年) 四七歳

二月より一二月まで『文学界』対談時評のホストをつとめる。八月、戯曲『家族展覧会』を英社より刊行。九月、「家族展覧会」が劇団民芸によって上演される。

一九八〇年(昭和五五年) 四八歳

九月下旬から一〇月中旬にかけて二〇日間、日本文芸家協会訪ソ作家団に加わってソビエト連邦を訪れる。十一月、「春の道標」を『新潮』に発表。『禁域』に続く自伝的長編小説となる。

一九八一年（昭和五六年） 四九歳

一月、「隠れ鬼」を『文芸』に発表。二月、『春の道標』を新潮社より刊行。六月、「石の話」を『新潮』に発表。連作小説「群棲」にまとめられる小説を『群像』に発表し始める。第一話は八月、「オモチャの部屋」、第二話は一〇月、「通行人」。

一九八二年（昭和五七年） 五〇歳

一月、ノンフィクション「止むを得ざる学校」を『海燕』に発表。二月、ノンフィクション『記録を記録する』を福武書店より刊行。三月、体験的エッセイ『働くということ』を講談社現代新書に書き下ろして刊行。連作の武蔵野短編集『たまらん坂』にまとめられる小説を発表し始める。第一話「たまらん坂」は七月、『海』に発表。

一九八三年（昭和五八年） 五一歳

二月より一九八四年四月にかけて、評伝風エッセイ「永遠なる子供エゴン・シーレ」を『文芸』に断続連載。三月、「袋の男」を『文学界』に発表。九月中旬より一五日間、日中文化交流協会の訪中作家代表团（団長・水上勉）に加わって中国を訪れる。以後、中国の文学者との交流を目的に訪中を重ねる。

一九八四年（昭和五九年） 五二歳

二月、「訪問者」（第一二話）を『群像』に発表して「群棲」完結、四月、『群棲』を講談社より刊行。本書により、第二〇回谷崎潤一郎賞を受賞。五月、『隠れ鬼』を新潮社より刊行、訪中作家代表团の共著『中国 心ふれあいの旅』（水上勉、中野孝次、井出孫六、黒井千次、宮本輝、鄧友梅、陳喜儒）を桐原書店より刊行。七月、『永遠なる子供エゴン・シーレ』を河出書房新社より、九月、シヨート・シヨート集『星からの1通話』を講談社より刊行。

一九八五年（昭和六〇年） 五三歳

一月より一九八六年一〇月まで「眠れる霧に」を『文学界』に連載。十一月、「おたかの道」（「たまらん坂」第二話）を『海燕』に発表。同月、建築家、原広司との長時間対談『ヒト、空間を構想する』を朝日出版社より刊行。

一九八六年（昭和六一年） 五四歳

四月から一年間、立教大学の非常勤講師として「現代小説論」を担当。四月より一〇月にかけて、随筆「北向きの窓から」を『朝日新聞』日曜日の家庭欄に連載。一〇月、「夜と光」を『群像』に発表。

一九八七年（昭和六二年） 五五歳

二月、戯曲「離れのある家」を『群像』に発表、劇団民芸により上演される。三月、「指」を『文学界』に発表。四月より一〇月にかけて、小説「風の履く靴」を『高知新聞』ほか地方六紙に連載。一一月下旬から一四日間、外務省派遣の文化使節団（団長・團伊玖磨）に加わり、

ユーゴスラビア、東ドイツ、ポーランド、ハンガリーの四カ国を訪問。この年上半期より芥川賞選考委員となり、現在に至る。

一九八八年（昭和六三年） 五六歳

一月、「涙」を『群像』に発表。五月、「たかはた不動」（第七話）を『海燕』に発表して、「たまらん坂」完結。七月、『たまらん坂』を福武書店より刊行。八月、『昭和文学全集第24巻（辻邦生・小川国夫・加賀乙彦・高橋和巳・倉橋由美子・田久保英夫・黒井千次）』が小学館より刊行され、自筆年譜を寄せる。

一九八九年（昭和六四年・平成元年） 五七歳

一月、「音」を『群像』に、「三叉路」を『海燕』に、二月、「黄金の樹」を『新潮』に発表。四月、野間宏『暗い絵・顔の中の赤い月』（講談社文芸文庫）に「解説」を寄せる。五月、「黄金の樹」を新潮社より刊行、『禁域』『春の道標』に続く自伝的小説となる。一月、「影」を『文学界』に発表。

一九九〇年（平成二年） 五八歳

一月、「夜の絵」を『群像』に、「知らない人達」を『海燕』に発表。同月より一九九一年六月にかけて、『文芸春秋』に「自画像との対話」を連載。

一九九一年（平成三年） 五九歳

一月、「庭の男」を『群像』に発表。五月より一二月にかけ、『読売新聞』（夕刊）に「捨てられない日」を連載する。

一九九二年（平成四年） 六〇歳

一月から一九九三年六月にかけて、「ココア色のノート」を『波』に連載。二月、「夜の友」を『文学界』に発表。一二月、『自画像との対話』を文芸春秋より刊行。

一九九三年（平成五年） 六一歳

一〇月、「ココア色のノート」を改題した『K氏の秘密』を新潮社より刊行。

一九九四年（平成六年） 六二歳

一月、「跨線橋」を『新潮』に発表。九月、『カーテン コール』を書き下ろしで講談社より刊行、同書にて、第四六回読売文学賞を受賞。

一九九五年（平成七年） 六三歳

一月、「声の巣」を『群像』に発表、七月、「嘔吐き」を『新潮』に発表。一〇月、『嘔吐き』を新潮社より刊行。

一九九六年（平成八年） 六四歳

二月、「夢の柵」を『文学界』に発表。六月、『戯曲の窓・小説の扉』を白水社から刊行。七月より一九九七年七月にかけて、「夢時計」を『東京新聞』ほか地方三紙に連載。九月、「散歩道」を『新潮』に、一〇月、「影の家」を『群像』に発表。

一九九七年（平成九年） 六五歳

四月、「空の風」を『季刊文科』に発表。一一月、『夢時計』上下巻を講談社より刊行。

- 一九九八年（平成一〇年） 六六歳
一月、「浅いつきあい」を『文学界』に、「眼」を『新潮』に発表。
- 一九九九年（平成一一年） 六七歳
一月、編著書『エゴン・シーレ魂の裸像』を二玄社より刊行。
- 二〇〇〇年（平成一二年） 六八歳
四月、「羽根と翼」を『群像』に発表。六月、第五六回日本芸術院賞受賞。七月、『羽根と翼』を講談社より刊行。八月、連作短編の第一話となる「祝いの夜」を『季刊文科』に発表。七月より二〇〇一年七月にかけて、「横断歩道」を『潮』に連載。十二月、「昼の火」（第二話）を『季刊文科』に発表。
- 二〇〇一年（平成一三年） 六九歳
一月、「電車の中で」を『群像』に発表。『羽根と翼』により、第四二回毎日芸術賞を受賞。五月、「日暮れの鍵」（第三話）、九月、「午後の影」（第四話）を『季刊文科』に発表。
- 二〇〇二年（平成一四年） 七〇歳
一月、「隣家」を『新潮』に、四月、「冬の腰」（第五話）を『季刊文科』に発表。六月、日本文芸家協会理事長に就任。七月、「家族風呂」（第六話）を、一〇月、「雨の道」（第七話）を『季刊文科』に発表。
- 二〇〇三年（平成一五年） 七一歳
一月、「丸の内」を『群像』に、二月、「記録」を『新潮』に発表。六月、「耳と眼」（第八話）を『季刊文科』に発表。一〇月から一二月まで『群像』の「文芸時評」を担当。
- 二〇〇四年（平成一六年） 七十二歳
一月、「一日」を『文学界』に発表。

本年譜作成にあたっては、小学館『昭和文学全集第24巻』所収の著者自筆年譜を参照し、また著者の一閱を得た。

（篠崎美生子編）